

断章 旭川のアイヌ語 地名研究

15

高橋 基

——ノチウとオサラツッペ川(中)——

オサラツッペ川の川口には、伝説の岩「ノチウ（nociw 星）」があり、明治三十年生まれの砂沢クラさんは、この伝説の岩について、次のように回想している。

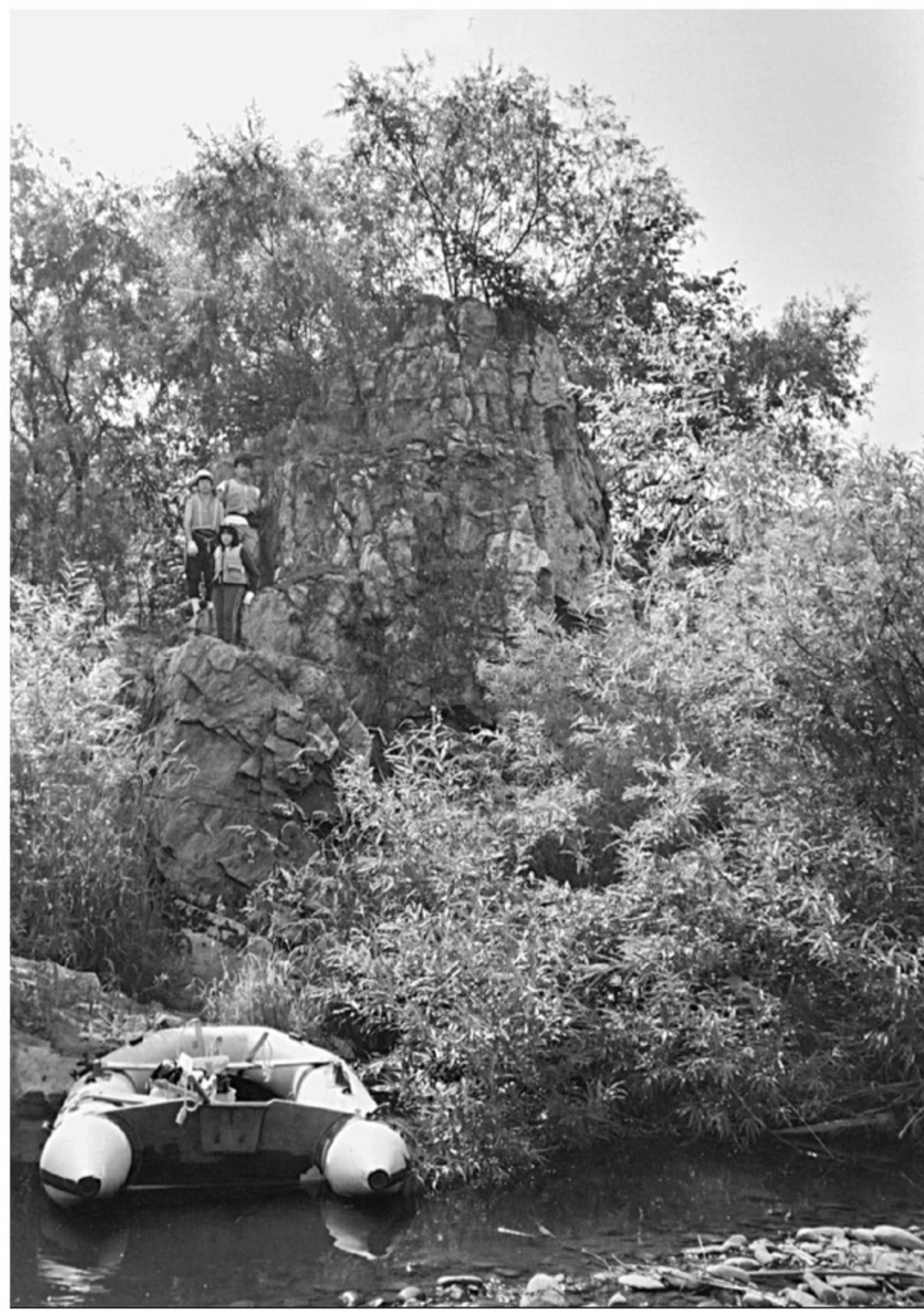
「オサラツッペ（ヨシ原の間を流れる川）の出口のところには天まで届くような背の高い岩があったそうです。ある時、星が落ちたので、みなで走って見に行くと、この岩が立っていたので、村の人はこの岩をノチウ（星）と呼んでいました。母（ムイサシマツト）が小さい時は、天にまで届くか、と思うほど大きかったのですが、私が見た時にはずいぶん小さくなっていました。」（『私の一代の話』）。

砂沢クラさんが記憶していたオサラツッペ川は、現在石狩川の中にあるため、前回写真で紹介したように、上流にある近文大橋、または、サイクリングロードからしか見ることが出来ない。どちらから見ても、砂沢クラさんが書いたように、「ずいぶん小さく」見える。

ラツペ川の意味と、ノチウの伝承と、ノチウの大きさに対する母と娘の印象の相違が率直に述べられている。

かつては陸続きにあっ

たこのノチウは、現在石狩川の中にあるため、前回写真で紹介したように、上流にある近文大橋、または、サイクリング



る所といふ意味でオサラツッペと云つたものである」（『伝説の旭川及其附近』と解説している。

先月の二十四日が、生誕百周年（明治四十二年生まれ）であった知里真志保は、登別生まれであるが、姉の知里幸恵が『アイヌ神話集』を執筆中の大正十年四月から、幸恵が上京して金田一京助宅で亡くなるまでの一年半余を、旭川の北門尋常高等小学校（附属小学校の前身）に在籍していた。後

約八ヶ余もある巨大な岩である。遠くからでは、砂沢クラさんの印象のように小さく見えるが、「一大巖石」

「巨巖」にふさわしいものであった。さて、先の野中掬泉の新聞記事で、

和語に堪能な「副酋長ヨモサク」と紹介された、天保十三年（一八四三年）生まれの村山与茂作翁は、オサラツッペ川の「永田地名解」に対して、

昭和六十三年七月、ゴムボートで石狩川を下った時に、前回紹介した明治二十一年の野中掬泉の新聞記事の「高さ大よ一丈（約三丈）余の「一大巖石」「巨巖」の確認のために、このノチウを調査した。写真がその時のもので、手前にあるのが四人乗りのゴムボート、ノチウの中段に三名の高校生が立っている。これから推定すると、ノチウは、基底部から

「そんな神話も伝説も別でない。別して深い意味はないのである。サラといふのは湿った葦の生へてゐる土地の事、ペは所の意であるから、アイヌは葦の生へてゐる湿地の沢山あ

ペ川—原名オサルベツ（O-sar-De-tsu川尻・葦原・川）。川尻に葦原のある川の義」と、村山与茂作翁や砂沢クラさんが触れなかった、オサラツッペ川の「オ（○）川尻川口」が、葦原である川と、アイヌ語文法に則り地名解をした。現今、これが通説となっているが、次号で他の説と新説も紹介したい。

（アイヌ語地名研究会幹事）
※毎月第1週号に掲載します